

## 『新春によせて』

一般財団法人 函館国際水産・海洋都市推進機構 推進機構長 嵯峨 直恒



嵯峨推進機構長

新年明けましておめでとうございます。ここ数年間猛威を振るった新型コロナウイルス感染もある程度事態が落ち着き、日常生活が平常に戻りつつある昨今ですが、皆様におかれましては佳き新春をお迎えることと拝察申し上げます。

さて、当機構も今春で組織の設立から15年、そして海洋研究センターの開所から満10年と一つの節目の年を迎え、次の4つの主要施策 ①水産・海洋に関する学術研究機関の集積 ②地域と学術研究機関の連携 ③観光と学術研究の融合 ④水産・海洋と市民生活の調和 を柱に掲げ、産学官連携による新産業の創出、雇用の創出を促し、ひいて

は産業・経済の活性化に繋げる「国際的な水産・海洋に関する学術研究拠点都市」の形成を目指してきたところであります。

①に関連しては、現在、函館水産試験場をはじめ、北海道大学大学院水産科学研究院や北方生物圏フィールド科学センター、北極域研究センター、公立ほこだて未来大学、函館工業高等専門学校の6つの学術研究機関と、民間企業7社の試験研究機関が入居しており、各々の入居機関では水産・海洋領域に関連した研究開発が行われ、多くの成果を上げつつあります。

②に関連しては、地域の重要な水産資源であるイカの資源動向に関する研究や昆布の増養殖技術に関する研究、そして海洋観測に関する機器開発に向けた研究等が行われています。また、生産量の変動に晒される天然の水産資源に頼る漁業経営のリスクを補うため、地域の重要な水産資源を対象とした増養殖振興に向けた取り組みも、海洋研究センター入居機関や地域の産学官の皆様との連携により始まっております。また、令和3年(2021年)から、函館市や北海道大学、そして当機構の三者共同による「キングサーモンの養殖」に関する研究開発が行われており、一昨年から、函館圏の産学官の協働による、キングサーモンとマコンプの完全養殖等を目的とした、内閣府の地方大学・地域産業創生交付金事業(通称「函館マリカルチャープロジェクト」)に採択され、当機構がその事務局機能の一端を担うこととなりました。

③、④に関連しては、昨年「マリンフェスティバル」等の海に親しんでもらうためのイベント等のアウトリーチ活動を4年振りに再開し、市民・観光客の皆様には多数ご参加いただきました。

ところで、昨年もイカ・シロサケの不漁、天然物昆布の不作等、地域の水産・海洋産業にとっていっそう厳しい年となりましたが、その一方で、入居機関を主とした産学官連携による函館圏でのサーモン養殖の小規模な実施やコンブ類の完全養殖の試み等、新しい養殖産業、食関連の新産業の育成による地域振興の展望が見えて来た年でもありました。当機構としても、入居研究機関の方々とはスクラムを組み、しっかりと地域の課題に向き合い、かつ、地域の産学官金、市民の皆様と連携して、水産・海洋を基軸とした地域の発展を切り拓いてゆく所存です。

結びにあたりまして、皆様の本年のご健勝をお祈り申し上げ、新年のご挨拶とさせていただきます。



『函館の水産業の発展を願って』

一般財団法人 函館国際水産・海洋都市推進機構 函館頭足類科学研究所 所長 桜井 泰憲



桜井所長

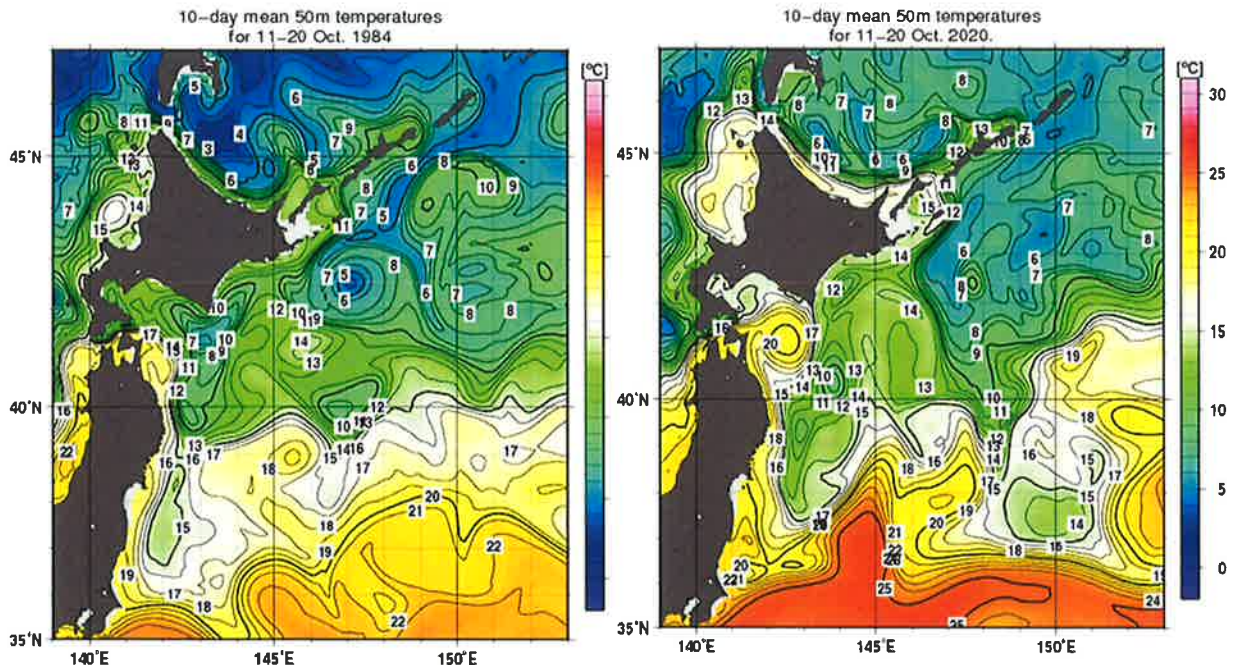
明けましておめでとうございます。令和6年、新たな年を迎えるにあたり、当推進機構に2016年4月に開所して8年目を迎えます函館頭足類科学研究所所長の桜井泰憲よりご挨拶申し上げます。当研究所の主な業務は、水産・海洋科学分野の調査・研究、特にイカ・タコ類、ブリ、クロマグロ、タラ類を含む漁業対象種の生態・資源研究、および高鮮度付加価値化や有効利用に関する研究と啓発活動、さらに環境変化にตอบสนองする漁業対象種の資源変動の解明と将来予測、新たな産業の創出などにもアドバイスを続けています。

今もコロナ禍が続く中で、昨年はわが国の水産業にも予測困難な出来事が数多くありました。スルメイカ、サンマ、サケなどの不漁、魚価の低迷、特に道南ではスルメイカのかつてない不漁が依然と続いています。こうした水産業の低迷の要因として、確実に進行する地球温暖化の影響を無視できない状況になっています。国際的にも、局所的な海水温の急激な上昇（海洋の熱波：Marine Heat Wave）が注目され、例えば、アラスカ湾ではマダラの産卵場の消滅などが起きています。特に、今夏の海面水温は観測史上最高水温になっています。参考までに、北日本の海水温が低かった1984年と2020年9月上旬の海水温分布の比較を図1に示します。この39年間経過した北海道周辺の海水温も確実に上昇し、北洋から産卵回帰するサケの南下阻害、サンマ資源の激減と漁場の沖合化、全道沿岸の定置網やサケ建網にも、暖海性回遊魚のクロマグロ、ブリが入網しています。昨年は、道南でも富山湾が北限とされるアオリイカ（通称：スマイカ）が漁獲されています。

図1. 1984年と36年後の2020年10月中旬の水深50mの水温分布の比較

北海道を取り囲む海の水温も、温暖化が進行中！

1984年と2020年(36年後)10月中旬の水深50mの水温分布の比較



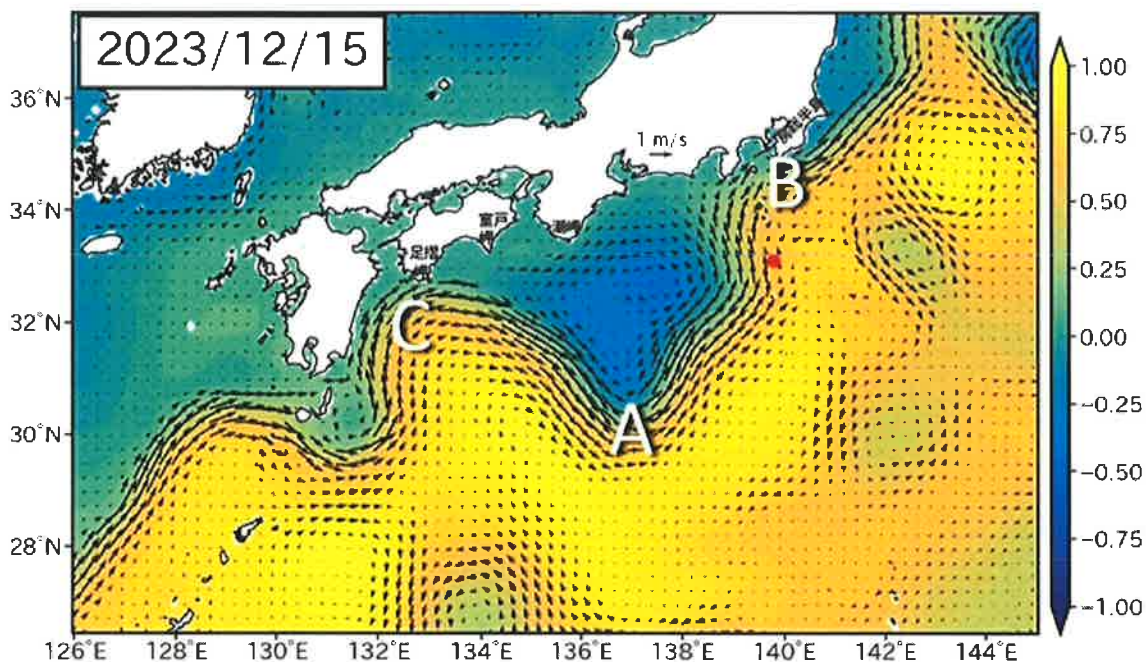
気象庁：海洋の健康診断表

特に、スルメイカは2010年代半ばからの不漁が今も続いています。なぜ、スルメイカが急に減ってしまったのか。そして、資源の復活に向けて、どのようなことをすればよいのか。スルメイカの資源変動の原因は、ふ化した幼生の生き残りに影響する環境変化なのか？それとも漁獲の影響なのか？秋生まれ群は、対馬海峡から南西日本海で生まれ、主に日本海を回遊しています。2000年代半ば以降の漁獲量の減少傾向は、産卵場の10月までの高水温化に伴って、11月から12月へと産卵期が遅くなったためと推定しています。

秋生まれ群は日本海の対馬暖流の大きくは3つの分流に沿った回遊ルートで北上して成長し、その後産卵のために南下しています。この中で、最近では「夏～秋の沿岸ルート」が高水温であるため、より水温が低く、回遊に適した「大陸ルート」と「沖合ルート」になることが多くなっています。その結果、日本や韓国の経済水域内の回遊資源が減り、特に日本側の漁獲の減少が顕著となっています。

一方、冬生まれ群は、主に1月から3月に東シナ海の大陸棚周辺海域で生まれ、その多くの幼イカは太平洋沿岸から沖合に拡がって成長しながら道東海域まで北上しており、その途中での回遊ルートでの漁獲死亡はほとんどありません。2010年代半ば以降からは、四国沖から紀伊半島にかけての「黒潮大蛇行」が続き、太平洋沿岸に沿ったスルメイカ幼生の北上ルートが断たれることが多くなっています(図2)。これらの複合的な海洋環境要因によって、冬生まれ群の激減が起きたと推定しています。通常は、東シナ海で生まれた冬生まれ群のふ化幼生は、薩南海域を経由して四国沖に輸送され、黒潮の内側域を経由して黒潮属流へと運ばれて北太平洋で大きく成長するイカです。冬生まれ群の復活に向けて、黒潮大蛇行による産卵場からのふ化幼生の輸送経路での大量死亡が解消されない限り、この群の復活は難しいのが現状です。

図2. 黒潮大蛇行の事例(2023年12月15日)



道南沿岸での暖海性魚類の漁獲は、魚種変化はあるものの、これからも確実に増え続けます。温暖化にも負けない持続的沿岸漁業のためには、漁獲対象種が変化することを前提に漁獲物の鮮度保持などの高付加価値化、大都市圏などの消費地や原材料を必要とする加工地域に向けた販路の拡大が重要です。さらに、TACなどの資源管理方策の柔軟な運用には、各漁業地の経済の基盤となる漁業の実態と将来をしっかりと踏まえ、産学官が一体となって真摯に取り組むことが不可欠です。函館を含む道南の水産業の発展に向けて、遠慮なくお声をかけて下さい。今年が水産関係者にとって笑顔でいられますようご祈念申し上げます。

## 1. 水産・海洋に関する学術研究機関の集積

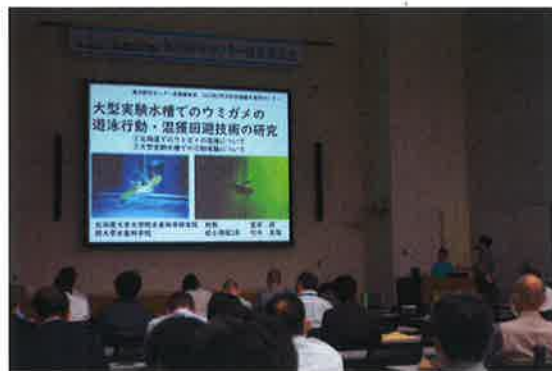
### 『海洋研究センター成果報告会』 R5.6.30

海洋研究センター成果報告会を4年振りに対面にて開催いたしました。

本シンポジウムでは、日頃から海洋研究センターに入居する学術研究機関や民間企業が、新たな革新技术や新産業の創出に向けて取り組んでいる水産・海洋に関わる研究開発事業について報告を行いました。

新型コロナウイルス感染症の流行後は、オンラインにて開催を行っていましたが、今年度は対面での開催となりました。入居4機関からそれぞれの研究内容やその成果について報告が行われ、また、久しぶりにポスターセッションも開催しました。

当日は約70名を超える参加があり、「キングサーモンの養殖に期待しています」、「ウミガメの研究など、大変興味深く聞かせてもらいました」、などの意見の他に、今後、スケソウダラの回遊についてや函館の養殖の取組状況について聞いてみたいなどの感想もあり、今後益々海洋研究センター全体が一丸となって地域に貢献するべく、その必要性を改めて感じた報告会となりました。



北海道大学大学院水産科学研究院による報告

## 2. 地域と学術研究機関の連携

### 『令和5年度イカ資源評価と予測に関する講演会』 R5.9.15

函館は我が国でも有数のイカの水揚げ港であるとともに、イカ珍味に代表される水産食品加工業を中心に、イカ釣り機やイカ釣り漁船など機械・電気・製造といった製造業も集積した、文字どおり「イカの街」としての産業クラスターが形成されています。

しかし、昨年度、スルメイカの地元市場での取扱量は、548tと過去3番目に低く、地域経済に大きな影響を及ぼしています。こうしたことから、当機構では、これまで地域の漁業者や水産加工業者に向けて、スルメイカの資源動向や今期の見通しなどの情報提供を目的として、講演会を開催してまいりました。

講演会当日は、5名の専門家から太平洋・日本海のスルメイカの資源動向や漁況についての講演や、北海道周辺のスルメイカの漁況状況、主要イカ類（アカイカ科）の漁獲動向について報告が行われました。報告会では、今年の海水温などの海洋環境は好条件であったが、資源量または日本近海のスルメイカの分布量の低迷が予想された。

昨年に続き3回目のオンラインでの開催となりましたが、道南地域の漁業者や水産加工業者などの水産業界関係者だけではなく、広く日本各地の水産関係者など約60名の参加がありました。

令和5年度  
イカ資源評価と予測に関する講演会

【主催】 一般財団法人函館国際水産・海洋都市振興機構、道庁  
 【共催】 地方独立行政法人、北海道水産研究所、水産研究所、道庁水産研究所  
 【後援】 函館市、函館市水産振興センター、函館市水産振興センター、函館市水産振興センター、函館市水産振興センター、函館市水産振興センター

参加無料  
(要事前申込)

オンライン開催：2023年9月15日（金）14:00～17:00

1. 開会挨拶 一般財団法人函館国際水産・海洋都市振興機構 推進部長 橋本 直樹  
 2. 講演  
 講演1. 「日本海におけるスルメイカの資源動向と漁況」  
 奥山 丈雄氏 国立研究開発法人水産研究・教育機構 水産資源研究所 水産資源センター 水産資源評価グループ 研究員  
 講演2. 「太平洋におけるスルメイカの資源動向と漁況」  
 松井 晴氏 国立研究開発法人水産研究・教育機構 水産資源研究所 水産資源センター 水産資源評価グループ 主任研究員  
 講演3. 「2023年度漁期前半のスルメイカの漁況と調査結果」  
 三原 栄次氏 国立研究開発法人水産研究・教育機構 水産資源研究所 水産資源センター 水産資源評価グループ 主任研究員  
 講演4. 「主要イカ類（アカイカ科）の資源と漁獲の動向」  
 西澤 文吾氏 国立研究開発法人水産研究・教育機構 水産資源研究所 水産資源センター 水産資源評価グループ 研究員  
 講演5. 「スルメイカの不適漁獲を減らす」  
 伊井 泰雄 一般財団法人函館国際水産・海洋都市振興機構 推進部長 橋本 直樹  
 3. 総会閉会

申込方法 申込締切：2023年9月8日（金）

● 参加希望の方は、WEBフォームまたはメールよりお申し込み下さい。  
 ➡ <https://forms.gle/Uefe4ooEg9Q3Ewir7>  
 ➡ office@marine-hakodate.jp

● メールでのお申し込みは、氏名を イカ資源評価会申込」とし、  
 ① 氏名 ② 所属 ③ 電話番号 ④ 性別 ⑤ 申込先下さい。

● 申込された方へ掲載のためのURLを数日メールにてご案内いたします。  
 ● メールが届かない場合は下記お問い合わせ先にご連絡ください。  
 ● 質疑・FAQでのお申し込みはお受けできませんのでご了承ください。

お問い合わせ先 一般財団法人函館国際水産・海洋都市振興機構(函館市青葉区20番5号)  
 TEL: 0133-21-4702 E-mail: office@marine-hakodate.jp

オンライン講演会のチラシ

## 2. 地域と学術研究機関の連携

### 『キングサーモン完全養殖技術研究事業』

近年、海洋環境の変化などから函館市の主要水産物であるスルメイカ、サケ、天然コンブ等の不漁が続いており、水産業界は深刻なダメージを受けています。このような状況の中でも持続可能な漁業を維持するため、函館市では育てる漁業のウェートを高めることを目的に、従来行ってきた種苗放流事業やコンブ養殖に加えて、新たに「つくり育てる漁業」として、魚介藻類等の養殖に着手しております。市では、ブランド力が高く高価値で取引されるキングサーモンの完全養殖を目指し、令和3年度より養殖技術の確立に向けた取り組みを進めています。

本事業は、函館市、北海道大学大学院水産科学研究院、当機構との共同研究で行われており、海洋研究センターでは、主にキングサーモンの飼育試験を行っています。今年度は南かやべ漁協管内の定置網で混獲されたキングサーモン70匹（昨年度63匹、死亡個体も含む）を入手、海洋研究センターに輸送し飼育試験やサンプリングを実施しました。



天然キングサーモンの個体（16Kg）

今年度得られた個体の平均体重は約7kgで、雌雄の比率は雄66%、雌34%でした。今年度も昨年に引き続き雌雄ともに成熟させることに成功、得られた受精卵は順調に孵化し、今では多くの子どもが水槽内を泳いでいます。一部を海洋研究センター1階エントランスホールで展示しておりますので、センターを訪れる際は実際の姿を見ていただければと思います。



エントランスホールで展示中の稚魚

また、令和4年に海洋研究センターで生まれた天然キングサーモンの子どもは大きく成長し、順調にいけば令和6年11月に初めての海面養殖試験に臨みます。それに向けて、海水への適応性や成長性などの飼育特性評価を行いながら飼育を継続していく予定です。

当機構では、今後も引き続き、キングサーモンの完全養殖技術研究のベースとなる試験飼育を継続しながら、人工授精や孵化など種苗生産技術に必要な基礎的知見を集積していく予定です。

2023年7月に人工授精を行い、無事に孵化、浮上しました



発眼卵（はつがんらん）

孵化仔魚（ふかしぎよ）

## 2. 地域と学術研究機関の連携

### 『函館マリカルチャープロジェクト』 (内閣府「地方大学・地域産業創生交付金事業」)

函館市が事業主体となり令和4年度に内閣府「地方大学・地域産業創生交付金事業」に採択された「魚介藻類養殖を核とした持続可能な水産・海洋都市の構築～地域カーボンニュートラルに貢献する水産養殖の確立にむけて～」(通称：函館マリカルチャープロジェクト)は、「キングサーモン完全養殖研究」、「マコンブ完全養殖研究」および「大学改革・人材育成」を3本柱としており、令和5年度には、新たに事業化やマーケティングを見据えた部会を立ち上げて、事業に取り組んでいます。



「キングサーモン完全養殖研究」においては、令和5年度も人工授精による孵化に成功し、前年度に生まれた幼魚の中間育成試験や餌料開発に向けた予備試験を開始しました。また、サクラマスを代替魚とした浮沈式生け簀での海面養殖試験も、生け簀の耐久性や海洋環境への影響調査を行うなど順調に進んでおり、昨年11月には約1,000尾のサクラマスを生け簀へ投入し、2回目の海面養殖試験を開始しました。



昨年生まれた稚魚



海上生け簀へサクラマスを投入

「マコンブ完全養殖研究」においては、令和5年度に、従来の天然コンブを母藻として得られた種苗を育てたコンブと養殖(促成)コンブを成熟誘導することで得られた種苗を育てたコンブの生長に遜色がないことが確認され、今後の生育状況に問題がなければ、完全養殖技術が確立することとなります。

また、養殖コンブの高品質化に関する試験に加え、CO<sub>2</sub>排出を抑えた評価用乾燥装置の試験機の製作を開始したほか、生コンブの加工特性の把握およびフコイダンの低分子化の検討や、ウニ除去による天然藻場調査も継続されています。



養殖コンブ生長状況調査



生コンブ加工特性の説明

「大学改革・人材育成」においては、令和4年10月に北海道大学に設置された「地域水産業共創センター」の活動が本格化して、地元企業等との対話の場となる「地域懇話会」を3回

開催したほか、CREEN人材育成プログラムの一環として「函館をもっと良いまちにプロジェクト」を立ち上げ、そこから共創センターを拠点として活動を行う市内の大学生・高専生による学生団体”ISARIBI with”が発足し、その活動をサポートしています。更には、CREEN人材育成カリキュラムも試行され、「水産学演習」「起業家演習」の演習科目を実施したほか、本格実施に向けて市内の大学・高専とともに準備が進められています。



地域懇話会開催

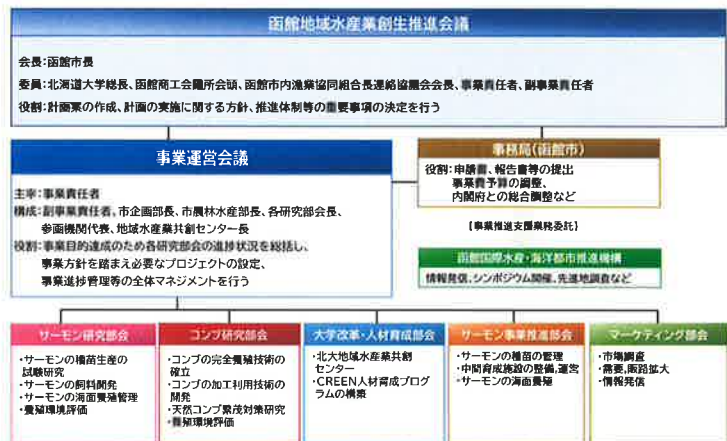


ISARIBI with 活動報告会

また、令和5年度に新たに設置した「サーモン事業推進部会」と「マーケティング部会」では、将来の事業化に向けた検討や函館真昆布のPR活動・販路拡大およびマーケティング戦略の策定などについて協議するなど、今後における事業の進展を図っています。

当機構は、函館市より令和4年度からプロジェクトの管理運営等を担

う「函館地域水産業創生計画事業推進支援業務」を受託し、マリカルオープンセミナーや各種イベントなど様々な機会に本事業の紹介を行っているほか、ホームページ、公式 YouTube チャンネルおよびX(旧ツイッター)での積極的な情報発信にも努めています。



海洋研究センター内の特設コーナー



マリンフェスティバルでのブース設置



カルチャーナイトでの展示



ビジネス EXPO へのブース出展

### 3. 水産海洋と市民生活の調和

#### 『函館マリンフェスティバル2023』 R5.7.15-16



子ども達に大人気のタッチプール

「海の日」にちなんで2日間にわたり、「函館マリンフェスティバル2023」を海洋研究センターで開催いたしました。

本イベントは、「函館国際水産・海洋都市構想」の実現に向け、産学官および市民が力を結集して、各種施策を推進するとともに、市民一人ひとりが「海」を知り、「海」と親しみ、「海」とふれあう生活との関わりを深めることにより、構想への関心を高め、構想の推進に繋げることを目的とした市民参加型イベントとして開催しており、新型コロナウイルスの影響により、実に4年ぶりの開催となりました。

1日目は、「表千家流学校茶道会」をはじめ、「海藻おしぼづくり・海藻万華鏡づくり」が行われ、多くの親子連れが思い思いの作品づくりを楽しみました。

2日目は、函館水産試験場の協力による「マリン縁日」、海のコーディネーターによる体験型海洋教育プログラム、北大マリン・ラーニング事務局による、「魚のからだを覗いてみよう！ -海と日本 PROJECT-」が行われました。

2日間を通しては、北海道大学北方生物圏フィールド科学センターの協力により、大型実験水槽でROV（水中カメラ）を駆使した「スルメイカの行動観察と群泳展示」をはじめ、JAMSTEC ブース「海と地球のペーパークラフトづくり」、「はこだてモノクラフトマーケット」、「海を学ぶ体験コーナー」、海産物の加工品等を販売した「フィッシャーマンズワーフ」、「ローイングマシン体験」などの多彩なプログラムが行われました。



体験型教育プログラム



函館西高校生によるワークショップ

また、海の日記念イベントとして「函館みなとパネル展」のほか、岸壁で行われた「みなと見学会」・「函館港で活躍する官庁船見学会」では、函館水産試験場の「金星丸」等が係留し、多くのお客様が船内を見学するなど、どのイベントも大盛況でした。

子ども達に大人気の「タッチプール」は、普段なかなか触れる機会のない海の生き物に直接触れることが出来る貴重な機会であるため、まるでこの日を待ちわびていたかのように生き物たちと楽しく遊ぶ多くの子ども達の

笑顔が印象的でした。

1日目は、朝から雨風ともに強く荒れた天候となり、来場者は約1,000名でしたが、天候が回復した2日目は4,000名を超える来場者となり、会場は本イベントを楽しみに来場いただいたお客様で賑わいを見せていました。

当機構では、「海」と市民生活との調和を主要施策として、今後も広く市民が「海」に親しみ、「海」とふれあう生活との関わりへの関心を高めるイベントを企画・実施してまいります。



ROVによるスルメイカの行動観察



### 3. 水産海洋と市民生活の調和

#### 『はこだてカルチャーナイト2023』R5.9.22



ミニタッチプール

函館市内の文化施設などを夜間に開放し、家族そろって地域の文化に触れるイベントとして「はこだてカルチャーナイト2023」が、はこだてカルチャーナイト実行委員会の主催により開催されました。

当機構としても趣旨に賛同し、海洋研究センターを会場に、エントランスホール・展望ロビーを夜間に開放し、海藻おしばづくりをはじめ、ミニタッチプール・函館マリカルチャープロジェクトPRブースのほか、キングサーモン発眼卵と若魚の展示を実施しました。

また、同センターの敷地内において、北海道開発局函館開発建設部による車両展示と屋外壁面での巨大PR動画をはじめ、館内では、函館税関による「なりきり検査官体験」のほか、北海道ガス(株)による「サイエンスショー」が行われました。

その他、各出展団体のマスコットキャラクターも登場し、多くの子供たちと触れ合うなど、当日は、親子連れを中心に1,700名を超える市民が来場し、大盛況のうちに終了しました。



サイエンスショーの様子



海藻おしばづくりの様子



函館真昆布出汁の試飲



マスコットキャラクターによる撮影会

#### 小中高校等の体験学習等の受け入れ

令和5年度は、函館市内及び道内外の幼・小学校7校、中学校2校、高等学校・専門学校7校で合計403名が海洋研究センターの見学に訪れました。当日は、海洋研究センター及び函館の水産業の現状について講義を行う他、施設見学の際は普段は入れないバックヤードで飼育魚への餌やり体験等を行いました。更に、各学校の希望に応じて、サケマス類の解剖実習も行い、生徒達の水産・海洋に関する関心を高めることが出来ました。

海洋研究センターでは、各学校等の要望に応じて、施設の見学や体験学習の受け入れを行っています。各学校での課外活動や自主研修のプログラムにもよりますが、海洋研究センターに関する簡単な説明と館内見学で1時間、これ以外の体験プログラムで2時間程度の時間が必要になります。また、各入居機関による研究紹介・体験学習の希望も承っています。4階の展望台または1階のラウンジでお昼休憩も可能ですので、水産・海洋の教育の場として、海洋研究センターを是非ご利用ください。



函館白百合学園中学校  
体験学習の様子

## 4. 推進機構の運営に関すること

### 令和5年度理事会・評議員会の開催状況

第1回理事会は、理事4名、監事2名の出席により、令和5年5月25日に開催し、令和4年度事業報告ならびに決算報告、定時評議員会の招集について審議され、全ての議案について異議なく原案どおり承認されました。

定時評議員会は、評議員5名の出席により、令和5年6月19日に開催し、令和4年度事業報告ならびに決算報告、評議員2名の辞任並びに理事の任期満了に伴う後任の選任について審議され、全ての議案について異議なく原案どおり承認されました。なお、新たな評議員として、公立はこだて未来大学学長の鈴木 恵二 氏、函館市長の大泉 潤 氏が選任され、理事は6名が再任され、新たな理事には、函館市企画部長の阿部 慶太 氏が選任されました。

評議員会での理事選任を受けて、代表理事ならびに業務執行理事を選定するため、第2回理事会を书面決議により行い、代表理事に石尾 清広 氏、業務執行理事に嵯峨 直恆 氏を再任とすることについて、理事全員から同意を得るとともに監事からの異議もなく、承認されました。

	氏名	役職
評議員	久保 俊幸	函館商工会議所会頭 ※評議員長
	境 勝則	函館商工会議所副会頭
	安井 肇	北海道立工業技術センター長
	都木 靖彰	北海道大学大学院水産科学研究院長
	鈴木 恵二	公立はこだて未来大学学長
	阿部 恵	函館工業高等専門学校長
	坂田 憲治	函館市内漁業協同組合長連絡協議会会長
	大泉 潤	函館市長
顧問	松本 榮一	函館商工会議所名誉会頭
	伏谷 伸宏	東京大学名誉教授

	氏名	役職
理事	石尾 清広	函館水産連合協議会会長 ※代表理事
	古伏脇 隆二	函館特産食品工業協同組合理事長
	中村 正俊	函館市内漁業協同組合長連絡協議会事務局長
	村瀬 充	函館商工会議所副会頭
	綿貫 豊	北海道大学大学院水産科学研究院副研究院長
	嵯峨 直恆	北海道大学名誉教授 ※業務執行理事
	阿部 慶太	函館市企画部長
	監事	西谷 裕幸
吉村 健太郎		函館水産研修会幹事長
須田 新崇		函館港湾振興会会長

### 編集後記

令和2年1月15日に国内最初の新型コロナウイルス感染者が確認されてから丸4年が経過しました。この間の流行拡大そして数回にわたる緊急事態宣言を経て令和5年5月8日には第5類感染症へ移行し、ようやく私たちの生活もコロナ前に戻りつつあるのかなという感じです。

そして、これまでは中止やオンライン開催を余儀なくされていた当機構の各種事業も、昨年6月に「海洋研究センター成果報告会」を対面により実施したほか、4年振りに開催した「函館マリンフェスティバル2023」では1日の来場者数が過去最高となる4千人を超え、「はこだてカルチャーナイト」にも1,700人もの皆さんにお越しいただきました。

さらには、体験学習や視察・見学の受け入れのほか会議での施設利用など、海洋研究センターの利用者数は昨年11月末の時点で既に一昨年を上回る実績となっており、社会活動や地域経済の活性化とともにいよいよアフターコロナの時代を迎えつつあるのではと思っています。

こうした中で、令和4年度から始まった「函館マリカルチャープロジェクト」ですが、昨年も全国の自治体や議会をはじめ企業や海外からの視察等があり、広くプロジェクトを紹介することができました。そして皆さんからは、こうしたプロジェクトが函館で実施できるのは、地域が一体となって取り組んできた水産・海洋都市構想があったからこそという感想もいただいております、これまでの20年に亘る構想の取り組みの成果と今後への期待を改めて感じます。

また、昨年は北大の地域水産業共創センターが主催する若者の活動にも参加させていただきました。函館の未来を語る彼らの想いを頼もしく感じ、こうしたプロジェクトを契機として彼らが活躍できるまちづくりを一層進める必要があると思えました。

令和6年は海洋研究センターの供用が開始されて10周年を迎えます。4階の展望ロビーからは、昨年再開された弁天地区岸壁の整備の様子を眺めることができますが、完成後は構想の中核となる研究拠点としての機能が強化充実されますので、これらを十分に活かして構想の新たな展開も望めるものと思っています。

機構といたしましては構想の推進母体としての役割を果たすべく、今年も構想実現に向けての取り組みを積極的に進めて参りますので、どうぞよろしくお願ひします。